



# 御調プライド

「当たり前」の事を「当たり前」に

令和2年5月8日(金) 第2号(特別号)



「**そうそう**」しよう！～想像力を鍛え、ピンチをチャンスに～



生徒の皆さん、体調はどうか。元気にしていますか。

5月6日(水)までの予定であった市内一斉臨時休業が5月7日(木)から5月31日(日)まで延長となりました。先が見通せず、ストレスがたまる一方ではないかと推察します。しかし、そうしたピンチな時だからこそ発想の転換に挑戦し、ポジティブに柔軟な発想をもって日々過ごしてもらいたいと願っています。

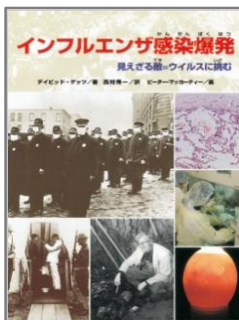
例えば、外出自粛で人と会って話す機会が激減していますが、こういうときにこそ“読書の習慣化”に取り組んでみてはどうでしょうか。

「子どもの読書活動の推進に関する法律」では、読書活動の意義は、「読書活動は、子どもが、言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身につけていく上で欠くことのできないもの」と記されています。(ちなみに、「子ども読書の日」は4月23日と定められています)

本の登場人物を自分に置き換えて考え、自分なりに具体的にイメージして理解しようとしてみてください。自分自身との対話(自己内対話)ともなりますし、家族で話題にすればさらにイメージは膨らみます。登場人物を「友」とすれば頭の中ではあるけれども、世界は自分次第でいくらかでも広がることでしょう。そうすることで自然と感性やそうぞう(想像、創造)力を高めることにもつながります。是非この機会に冊数等自分なりの目標を決めて読書活動に一層挑戦してみてください。(場合によって、国語の教科書でも道徳の教科書でもよいと思います！)

ちなみに、私はこれまで二週間に一度家の近くの図書館で借りていましたが、コロナの影響で3月の中旬から学校の図書室で借りることにしました。読書の時間は、平日は夜1時間位、土日はどこにも行けないので大体3、4冊読むようにしています。その結果、借りた本はここまで39冊(小説、詩歌、エッセイ、啓発本等)になりました。**サンキュー**です。

では、今回そのうちの1冊を紹介したいと思います。



それはデイビッド・ゲッツ氏の『インフルエンザ感染爆発 見えざる敵=ウイルスに挑む』(2005年、金の星社)です。1918年に起こったスペイン風邪についての児童書で、かつて多くの死者を出した恐るべき感染症のインフルエンザの次なる爆発的流行を阻止すべく立ち向かった予防と治療の最前線に立つ人々の姿を追った話です。そこには科学的な知識や技術、情熱だけでは、簡単に打ち砕けないさまざまな障害がありましたが、それでも医療に従事する人たちは諦めず人間の未来のために戦い続けた姿に感動しました。

※ 図書室にありますので、手にとってもらえたら嬉しいです。

ここで、そうした医療に従事する人たちを自分に置き換えて考えるために参考となるであろう、この本の訳者である西村秀一氏のメッセージを紹介します。

わたしは、この本を読んでくれたみなさんのなかから、将来、このようなパンデミックとの戦いに加わってくれる人が一人でも多くでてくれればと思って訳しました。科学の分野でなぞを解きあかそうとする人、有効なワクチンや薬を開発してくれる人、それらを世界の人びとに公平にいきわたらせるための仕事につく人、社会的に弱い立場にある人たちのために働く人、行政でそれらの仕事をまとめ上げる仕事をする人など、この戦いにはいろいろな形があり、それぞれ得意な分野をもった人たちが必要です。しかし、「この戦いに加わる」という意味は、かならずしもみんなが「この戦いのためにだけ」の仕事をするという意味ではありません。むしろ専門にやる人は、ごく限られるでしょう。いろいろな能力を持った人たちそれぞれが、いつもの仕事の領域でその能力を発揮していくなかで、結果的にこの戦いに参加する機会がほとんどでしょう。そういった多くの人の力があわさることが大事なのです。

どうか「なぜ?どうして?」という疑問を解決しようとする気持ち、「みんなのためにがんばろう」といった気持ちを持ち続け、これからの勉強にはげんでください。どの分野に進もうと、そういった気持ちでつちかわれたみなさんの力は、かならず人びとのために役立つはずですよ。

「前へ」 大木実

少年の日読んだ「家なき子」の物語の結びは、  
こういう言葉で終わっている。

―― 前へ。  
僕はこの言葉が好きだ。  
(中略)

辛いこと、厭(いや)なこと、哀(かな)しいことに、出会うたび、  
僕は弱い自分を励ます。

―― 前へ。

